

東京へ移住し給ふ。金澤在城僅に四年なり。按ずるに、天正八年佐久間氏居城と定めしより、十一年その滅亡まで四年。同十一年前田家始祖利家卿居城と定められしより、十四世慶寧卿明治二年封土奉還城地退去に至るまで、年曆凡そ二百八十七年なり。然るに明治六年一月皇國中鎮臺を六ヶ所に改め置き、二月各府縣の城郭をば陸軍省の所轄となし、金澤城を尾張名古屋鎮臺の分營所と成したり。

○城空前田家來歴考

寛永十八年幕府へ進達ありし系圖に云ふ。前田。菅原氏。菅承相之後胤也。菅承相有筑紫而生二子。兄云原田。其後前田氏來于尾州。爲住人。慶長七年十月晦日夜亥時。雷震加州金澤城天守回祿時。所藏之家譜寶器等悉燒失と。是家系の古傳説といふべし。村井長明の陳善錄に、利家様は菅原氏、菅承相の御はし也。筑紫衆、利家様六代已前に尾張へ御越被成、荒子に居住被成候よし、御物語承り候。とあり。按ずるに、菅公の筑紫に左遷したるや、菅家後草卷第十三、慰小男女詩に、衆姉摠家留、諸兄多謫去、小男與小女。相隨得相語、晝准常在前、夜宿亦同處。云々。と作らせ

給へば、筑前國太宰府へ隨行せられしは、小男小女の二子のみなる事知られけり。また配所にて二子を出生ありし事は、諸記録にも見えず。殊に日本紀略に、延喜元年正月廿五日戊申。以右大臣從二位菅原朝臣任太宰權師。二年二月廿五日丙申。薨於西府。年五十九。とありて、配所に居給へる事僅の年間にして、さる事あるべきよしなし。然るを三壺記に、筑紫にて御出生の御子を、原田黨の先祖と申しけり。其中より尾張へ一人御越被成、代々前田庄に住み給ひ、自然と前田氏に成り給ふとも、又或は、原田。秋月は漢高祖の苗裔にて、數代西國に住す。菅承相筑紫へ配流の後、其の子孫原田と縁を結び、原田の菅家といへり。など、記載し、藩翰譜には、或人の曰く、菅家の御末、筑紫太宰府の菅廟のほとり前田といへる所に住す。是筑紫前田のよつて出でし所なり。其の子孫尾張國に移るなり。といへり。又菅家見聞集の序には、菅公配所にて出生の男子、筑紫に止り、武家と成りて代々九州の菅家と稱する是也。とあり。平次按ずるに、九州の菅家といふ黨ある事、未だ見當らず。又太宰府菅廟の邊りに前田と云ふ地名の事は、

萬卷昌興自記に、貞享三年二月廿五日、菅家左遷之時之太宰府何れの國に候哉。神功皇后三韓御征伐、異狄之耳を削ぎて、筑紫に斬耳堂と號し塚に築かしめ給ふ之由。是前田の邊の由也。定めて當家名字は此所たるべし。是又何れの國に候哉。國史等を以て可相考旨、小瀬助信・室直清等に可申渡旨被仰出、則申渡也。とあり。さてまた筑前の原田氏は大藏姓にて、菅公の後胤にもあらず。九州記に、天慶三年藤原純友追討の時、大藏朝臣春實軍功を顯す。勳功の賞に、筑前國御笠郡を賜ひて、原田に住す。故に嫡流を原田と名乗る。是原田・波多口・高橋等の祖也。と見ゆ、三代實錄卷六に、大藏姓は、後漢孝靈皇帝四代孫阿知使主後。與坂上大宿稱同祖也。とあり。前田といふ地名は、筑前國にありしと見えて、文德實錄卷七に、齊衡二年十一月朔癸丑。筑前國奏言。上座郡大領外從七位上前田臣市成理那年久。善政日聞。百姓同聲謂之不煩云々。といふ事見ゆ。たれど、前田姓は國史・姓氏錄にも、其の始祖詳かならず。元より菅原氏とは異姓なること著明也。抑、前田家は菅公の苗裔にして、菅家の始祖を考ふるに、續日本紀に、天應

元年六月壬子、遠江介從五位下土師宿禰古人。外從五位下土師宿禰道長等一十五人官。土師之先出自天穗日命。其十四世孫名曰野見宿禰云々。望請因居地名改土師以爲菅原姓。勅依請許之と。是桓武天皇の御世にて、此の時大和國の地名によりて、初めて菅原姓をたまはりたり。さて延暦四年十二年甲申、故遠江介從五位下菅原宿禰古人男四人。給衣糧令勤學業。同九年十二月辛酉晦。勅外從五位下菅原宿禰道長等。並賜姓朝臣。など見わたる。道長は、古人の長男なるよし菅家傳に記載せり。按ずるに萬葉集卷十七に、天平十八年八月七日夜。集于越中守大伴宿禰家持館宴歌一首。史生土師宿禰道長。ぬば玉の夜はふけぬらし。たましくしげ二上山に月かたぶきぬ。右道長は道長の寫し誤りなるべし。東大寺所藏、天平寶字五年正月廿八日、攝津職判依牒の連署に、正七位上行少屬土師宿禰道長と見わたれば、越中史生より攝津職の少屬に轉任せしにや。道長の弟清公は、續日本後紀に、承和九年十月丁丑。文章博士從三位菅原朝臣清公薨。故遠江介從五位下古人之第四子也。とあり。是菅公の祖父なり。又清公卿の男是善卿は、文德